

加藤孝造（1935-）

陶芸家である加藤孝造は瀬戸黒の普及で国の人間国宝、志野で岐阜県の人間国宝に認定されている。

加藤は 1954 年、岐阜県の陶磁器試験場でそのキャリアをスタートさせた。新しい製陶技術の開発が仕事であったが、彼は伝統的な美濃焼に興味を持っていた。1970 年に仕事を辞め、当時、失われた美濃焼の技法を復活させたことで知られる荒川豊蔵（1894-1985）に弟子入りした。

1973 年からは個人での活動を開始し、瀬戸黒、志野、黄瀬戸など、従来の技法での芸術表現に専念した。多治見市北部の丘陵地に（より手間のかかるタイプである）穴窯と登窯を築き、現在も使用している。また、加藤は電気ろくろよりも、電気を使わないろくろを愛用している。これらの手間のかかる方法では生産量が限られてしまうが、彼の基準は厳格であるため、生産量はさらに制限される。彼は一度に 220 個もの作品を焼くことで知られているが、残す作品は納得がいく 8～10 個のみだという。

今回展示されている「瀬戸黒茶碗」もその一つ。この茶碗は、伝統的なスタイルの深い黒色で、瀬戸黒の特徴である円筒形と丸い底面を持っている。縁には山道のような緩やかな起伏があり、この作品の特徴となっている。